日本における薛濤詩の受容

横田　むつみ

はじめに

図Ⅰに示す「薛濤図」は、江戸時代後期の南画家小田海僊[1]（一七八五～一八六二年）の弘化三年（一八四六年）の作である。右上部には八十文字の添書がある。小田海僊は如何なる書籍に拠って、この添書を書き付けたのか。薛濤の伝記と詩に関する認識は如何様にして日本に伝播されたのか。本論は、この疑問への解決を試みたものである。

薛濤の伝記は『新唐書』『舊唐書』にはないが、略伝や挿話を伝える筆記類や詩話の類は数多ある[2]。このうち南宋の章淵『稿簡贅筆五巻』[3]には、「蜀の妓女薛濤は、長安の良家の娘であったが、父の任官に伴い蜀に移り住む。父亡き後、母に養われているうち、蜀を治めていた韋皐に召されて酒宴に侍り、詩を賦すようになって楽籍に入る」とある。更に、元の費著『蜀牋譜一巻』[4]には、「韋皐から李徳裕までの歴代十一人の節度使に仕えて、詩によって知遇を受けた。その間に元稹・白居易・牛僧孺・令狐楚・裴度・嚴綬・張籍・杜牧・劉禹錫等、凡そ二十人の名士とも詩を唱和した」とある。また薛濤が詠じた詩は、『稿簡贅筆』には「有詩五百首」とあるが、現存しているのは約九十首[5]である。

日本での薛濤研究は、一九六四年刊行の集英社版「漢詩大系」の辛島驍『魚玄機　薛濤』「薛濤[6]」をもって嚆矢とする。

これには、豊富な資料を基に精緻な考証がなされている。上梓されてから約五十年を経た現在に到るまで、この業績に続く研究論文等[7]は少ない。この「漢詩大系」『薛濤』は中国でも翻訳出版されて、中国の研究者にも多大な影響を与えている[8]。

中国における近代的薛濤研究は、一九二、三〇年代から始まり、一九八三年には薛濤研究の礎となった張篷舟『薛濤詩箋』[9]が刊行されている。そして、一九九〇年成都に薛濤研究会設立以来、論文数も増えて薛濤研究は更に発展[10]している。また二〇〇四年には、それまでの研究を集大成した劉天文『薛濤詩四家注評説』[11]が出版された。これには薛濤詩八十七首についての四家注を比較考証した劉天文の評論と、中国でのこれまでの薛濤研究の成果が集約されている。中国における薛濤研究は、成都の望江楼公園内にある「薛濤記念館」を研究の拠点として、近年も盛況を極めている。

本稿では、このような日中での薛濤研究の現状を踏まえた上で、日中書籍交流史という観点を中心にして、薛濤詩が、いつ、どのようにして日本に伝わり、どのように読まれて受容されてきたかという点について考察を試みる。更に、薛濤詩が日本において受容され愛好された要因についても考察する。

一　薛濤詩の日本への伝来

（一）「薛濤図」添書

「薛濤図」[12]添書を見てみよう。この「薛濤図」は、縦一一七・〇cm、横五〇・四cmの絹本着色の美人画である。現在、京都の洛東遺芳館に所蔵されている。海僊作の人物画としては、この「薛濤図」の他に「班婕妤図」「林和靖図」があるが、両画とも人物像のみで添書はない。

以下が、「薛濤図」の右上部の添書の全文である。

薛濤、字洪度、本長安良家女。父郎、因官留京於蜀。濤及笄以詩聞。僑止百花潭。濤八九歲知聲律。其父一日坐亭中、指井梧示之曰、庭際一梧桐、幹聳入雲中。令濤續之、應聲云、枝迎南北鳥、葉送往来風。父愀然。

弘化三年丙午復月海遷寫

図Ⅰ　薛濤図

（1846 年　絹本着色）洛東遺芳館蔵

薛濤、字は洪度、本と長安良家の女なり。父郎、官に因りて蜀に留まる。[13] 濤笄に及び詩を以て聞こゆ。百花潭に僑止す。濤八、九歳にして聲律を知る。其の父一日亭中に坐し、井の梧を指さし之に示して曰く、「庭際の一梧桐　幹聳えて雲中に入る」と。濤をして之に續かしむるに、聲に應じて云ふ、「枝は迎ふ南北の鳥　葉は送る往来の風」と。父愀然たり。

弘化三年丙午復月海遷寫

この八十文字の「薛濤図」添書は、如何なる書籍に拠って書かれたか。薛濤の伝記が記されている書籍のうち、「薛濤図」添書と同様の記載があるものは、『薛濤詩一巻』『洪度集一巻』『名媛詩歸三十六巻』の各小伝、及び『稿簡贅筆五巻』『蜀牋譜一巻』である。従ってここで、この五種の書籍の伝記に関する記述部分と、「薛濤図」添書との照合を試みる。[14]

照合の結果、五種の書籍のうち「薛濤図」添書との符合点が最も多いのは、『名媛詩歸三十六巻』小伝であることが判明した。以下に示すのは、「薛濤図」添書に、『名媛詩歸三十六巻』小伝を重ね合わせたものである。・・・は、両文が一致する部分である。（　）は、「薛濤図」添書にはなく、『名媛詩歸三十六巻』のみに記されている文字を示す。

（寓）　（外）

薛濤字洪度。本長安良家女。父郎因官留京於蜀。濤及笄以詩聞。僑止百花潭。濤八九歳知聲律。其父一日坐亭中。指井梧示之曰。庭際一梧桐。幹聳入雲中。令濤續之。應聲云。枝迎南北鳥。葉送往来風。父愀然。

（庭）　（除）（古）（聳幹）　（卽）（曰）

誤写と考えられる僅かな差異はあるが、「薛濤図」添書は『名媛詩歸三十六巻』小伝とほぼ一致する。ただ「僑止百花潭

（百花潭に僑止す）」という一文が、「薛濤図」にはあるが、『名媛詩歸三十六巻』にはない。薛濤の晩年の生活ぶりを表わしているこの一文は、『薛濤詩一巻』小伝と『蜀牋譜一巻』には記されている。しかしこれらの書籍には、父親が詠んだ詩句に薛濤が即座に続けて詠んだ、という添書にある幼少期のエピソードについては一切触れられていない。従って添書が、『薛濤詩一巻』や『蜀牋譜一巻』に拠ったとは言えない。この一文についての疑問は残るが、「薛濤図」添書は、基本的には『名媛詩歸三十六巻』小伝に拠ったとみてよいと考える。

なお『名媛詩歸三十六巻』とは、上古から明代までの女流詩人四百十余名、二千七十余首を収めた全三十巻のアンソロジーで、明の鍾惺の編輯によるものである。この『名媛詩歸三十六巻』の巻十三に、薛濤の小伝と薛濤詩八十四首が収録されている。

（二）薛濤の別集と総集

このように江戸時代後期に、小田海僊は、『名媛詩歸三十六巻』小伝に拠って、「薛濤図」添書を書き付けた可能性が窺える。では、この『名媛詩歸三十六巻』を始めとする種々の薛濤詩を収録する詩集は、いつ日本に伝来したのか。そして、小田海僊が「薛濤図」を描く際には、いつ『名媛詩歸三十六巻』を手にすることが出来たのか。

日本において漢詩は、奈良、平安時代から、和歌と並行して多くの知識人に詠まれてきた。その漢詩の作者は、天皇や宮廷貴族、それに一部の知識人層だけであった。しかし、江戸時代も後期になると、作者層は一般大衆にまで広がっていく。『三體詩』『唐詩選』『唐詩三百詩』等の唐詩の選集と注釈書類も出版されて、多くの人々に愛読された。しかし、これらの唐詩の選集には、女流詩人の詩は一首も収録されていない。従って、当時の日本人は、薛濤詩をこれらの書籍からは目にすることはできなかった。では、日本人は何によって、いつから、どのようにして薛濤詩を知ることとなるのか。

薛濤詩の日本への伝来の時期を探る前に、ここでまず明らかにしなければならないことは、薛濤に関しては、どのような

別集、並びに総集が存在したかということである。まず薛濤個人の作品集である別集についてであるが、本名の「薛濤」や字の「洪度」、あるいは蜀の江名の「錦江」を冠した以下のものがある。

『薛濤錦江集五巻』（〔南宋〕晁公武等撰『昭徳先生郡齋讀書志四巻後志二巻』に著録）
『薛洪度詩一巻』（〔南宋〕晁公武撰『昭徳先生郡齋讀書志二十巻』に著録）
『薛濤集一巻』（〔南宋〕陳振孫撰『直齋書録解題二十二巻』に著録）
『錦江集五巻』（〔元〕辛文房撰『唐才子傳十巻』に著録）
『薛濤詩一巻』（成都洗墨池從楊慎家藏刻本等）
『洪度集一巻』（『全唐詩』「薛濤」小伝等に著録）

このうち、『薛濤錦江集五巻』以下『錦江集五巻』までの四種の別集[15]は、全て亡佚している。現存している別集は、『薛濤詩一巻』と『洪度集一巻』のみである[16]。

次に、薛濤詩を収録する総集の主なものを明らかにする。参考にしたのは、京都大学人文科学研究所刊「唐代研究のしおり」の『唐代の詩人』並びに『唐代の詩篇』[17]、及び張篷舟箋『薛濤詩箋』「薛濤詩専集選集収詩情況」[18]である。以下に挙げているのが、薛濤詩を収録する二十二種の総集である。唐の光化三年（九〇〇年）成立の『又玄集三巻』から、成立順に列挙して、書籍名の下には、収録している薛濤詩数を附記する[19]。詳細については、表Ⅰ「薛濤詩を収録する総集の日本への伝来年と和刻本刊行状況」を参照されたい。

〔唐〕韋莊輯『又玄集三巻』　二首
〔前蜀〕韋縠輯『才調集十巻』　三首
〔北宋〕李昉等奉敕輯『文苑英華一千巻』　三首

〔南宋〕陳應行輯『吟窗雜録五十巻』　七首　（このうち二首は摘句）
〔南宋〕趙孟奎輯『分門纂類唐歌殘十一巻』　七首
〔明〕張之象輯『彤管新編八巻』　十二首
〔明〕田藝蘅編『詩女史十四巻』　十六首
〔明〕酈琥輯『彤管遺編二十巻』　四十四首
〔明〕池上客編『名媛璣囊二巻』　八首
〔南宋〕洪邁原本輯　〔明〕趙宧光校　〔明〕黄習遠竄補『萬首唐人絶句四十巻』[20]　七十三首
〔明〕張夢徵彙選『青樓韻語四巻』　三十五首
〔明〕鄭文昂編『古今名媛彙詩二十巻』　八十四首
〔明〕鍾惺點次『名媛詩歸三十六巻』（『古今名媛詩歸』[21]）　八十四首
〔明〕楊肇祉編『唐詩豔逸品四巻』　三首
〔明〕趙世杰輯『古今女史　前集十二巻　詩集八巻　附録一巻』　五十二首
〔明〕胡震亨編『唐音統籤一千三十三巻』　七十三首
〔清〕徐倬　徐元正同輯『全唐詩録一百巻』　二十八首
〔清〕揆敘輯　『歴朝閨雅十二巻』　二十二首
〔清〕彭定求等奉敕輯『全唐詩九百巻』　八十九首
〔清〕陸昶輯評『歴朝名媛詩詞十二巻』　二十九首
〔清〕編者不詳『薛濤李冶詩集』　九十四首
〔清〕劉云份輯　『唐宮閨詩二巻』　八十九首

以上の二十二種の総集のうち、明代成立の『彤管新編八巻』『詩女史十四巻』『彤管遺編二十巻』『名媛璣囊二巻』『青樓韻語四巻』『古今名媛彙詩二十巻』『名媛詩歸三十六巻』『古今女史　詩集八巻』の八種と、清代成立の『歴朝閨雅十二巻』『歴朝名媛詩詞十二巻』『薛濤李冶詩集』『唐宮閨詩二巻』の四種、計十二種の総集は、女流詩の選集である。

（三）『舶載書目』等から探る薛濤詩の伝来

これまで、薛濤詩の別集、並びに薛濤詩を収録する総集の書籍名を明らかにした。次に、これらの別集や総集が日本に伝来した時期について、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』並びに『舶載書目』等から考察する。[22]

『江戸時代における唐船持渡書の研究』は、江戸時代に長崎貿易によって中国から輸入した書籍に関する資料を蒐集して総合したものを、一九六七年に、関西大学東西学術研究所が「研究叢刊」第一号として刊行したものである。「研究編」と「資料編」から成り、「資料編」には、「齎来書目」「大意書」「長崎会所取引時の諸帳」（書籍元帳、見帳、直組帳、落札帳）、及び「商舶載来書目」といった唐船持渡書の資料が掲載されている。『舶載書目』も、一九七二年に、同研究所が「資料集刊七」として刊行したものである。宮内庁書陵部所蔵の「舶載書目」と、内閣文庫所蔵の「分類舶載書目」を影印刊行している。

このうち、『江戸時代における唐船持渡書の研究』の「資料編」に挙げている「齎来書目」「大意書」「長崎会所取引時の諸帳」（書籍元帳、見帳、直組帳、落札帳）及び「商舶載来書目」と、『舶載書目』の「宮内庁書陵部所蔵舶載書目」には、長崎に齎された唐本の書目名と輸入年等が記されている。従ってこれらにより、唐本の伝来年が特定できる。そこで、先に挙げた薛濤詩の六種の別集、及び二十二種の薛濤詩を収録する総集が、この両書の何れの唐船持渡書の資料に記録があるか照合を試みた。

大庭氏は、また、『江戸時代における唐船持渡書の研究』刊行の際には、紙幅の関係で刊行を控えた唐船持渡書の資料

や、その後の研究で所在が明らかになった資料も引き続いて刊行している。従ってここでは、それらのうちの、「元禄元年の唐本目録」「内閣文庫の購来書籍目録」「東北大学狩野文庫架蔵の御文庫目録」、及び「寅十番船齎来書目」についても同様に、六種の別集、及び二十二種の薛濤詩を収録する総集の伝来の記録の有無を確認した。

その結果、別集については、六種の別集のうち、すでに亡佚している『薛濤錦江集五巻』『薛洪度詩一巻』『薛濤集一巻』『錦江集五巻』の四種の別集、及び現存している『薛濤詩一巻』『洪度集一巻』の二種の別集のいずれの書名も、伝来の記録はなかった。従って江戸時代には、薛濤詩の別集類は伝わっていないことになる。

一方、総集類については、二十二種の薛濤詩所収総集のうち、十五種の総集が伝来しており、その伝来年が明らかになった。表Ⅰ「薛濤詩を収録する総集の日本への伝来年と和刻本刊行状況」に、これらを纏めた。「日本への伝来年」は、『江戸時代における唐船持渡書の研究』並びに『舶載書目』等の唐船持渡書の資料に記録があった年を示す。書籍の成立年については、序文等を参考にして特定したが、特定できない書籍は、張篷舟箋『薛濤詩箋』の「薛濤詩専集選集収詩情況」に準拠した。

表Ⅰの「日本への伝来年」を見ると、『又玄集三巻』『才調集十巻』『文苑英華一千巻』『吟窗雑録五十巻』『彤管新編八巻』『詩女史十四巻』『彤管遺編二十巻』『名媛璣囊二巻』『萬首唐人絶句四十巻』『名媛詩歸三十六巻』『唐詩豔逸品四巻』『古今女史　詩集八巻』『全唐詩録一百巻』『全唐詩九百巻』及び『歴朝名媛詩詞十二巻』の十五種の総集が、江戸時代の一六〇〇年代半ばから末期にかけて、中国から日本に齎されたことが分かる。このうち、女流詩の選集は、『彤管新編八巻』『詩女史十四巻』『彤管遺編二十巻』『名媛璣囊二巻』『名媛詩歸三十六巻』『古今女史　詩集八巻』及び『歴朝名媛詩詞十二巻』の七種である。

なお、「薛濤図」が『名媛詩歸三十六巻』小伝に拠って記されたであろうことは、本章「（一）『薛濤図』添書」で考察したが、『名媛詩歸三十六巻』の日本への伝来は、一七二三年、一七五四年、一七八二年、一七九九年であり、小田海僊が

「薛濤図」を制作したのは、それ以降の一八四六年であるので、書籍の伝来と制作年についての齟齬はない。

日本への伝来が最も早かったのは、『古今女史　詩集八巻』の寛永十八年（一六四一年）で、最も遅かったのは、『歴朝名媛詩詞十二巻』の嘉永三年（一八五〇年）であるので、この約二百十年の間に、これらを含む十五種の薛濤詩を収録する総集が日本に齎されていることが分かる。江戸時代の日本人は、これらの総集から薛濤の詩を知り得たと言うことができるであろう。

江戸時代については、以上のように、『江戸時代における唐船持渡書の研究』並びに『舶載書目』等から考察したが、江戸時代より前はどうであったのか。成立年から考えて、江戸時代より前に伝来の可能性があるのは、表Ⅰの唐の光化三年（九〇〇年）成立の『又玄集三巻』から、『才調集十巻』『文苑英華一千巻』『吟窗雑録五十巻』、そして南宋の咸淳元年（一二六五年）成立の『分門纂類唐歌詩殘十一巻』までの五種の総集である。

『又玄集三巻』『才調集十巻』『吟窗雑録五十巻』については次章でも述べるが、和刻本の刊行が江戸末期であることから、流伝したのはやはり江戸期とみられる。

また、この『又玄集三巻』（光化三年《九〇〇年》成立）、『才調集十巻』（九一〇年頃に成立）、『吟窗雑録五十巻』（紹興五年《一一三五年》成立）に、『文苑英華一千巻』（太平興国七年《九八二年》成立）、『分門纂類唐歌詩殘十一巻』（咸淳元年《一二六五年》成立）を加えた五種の総集は、仮に江戸期より前に伝わったとしても、採録している薛濤詩数が一首から七首と少ない上に、当代の書籍刊行の状況も勘案すると、薛濤詩を目にする機会があったのはごく一部の限られた人だけであったと推測される。これらを総合すると、薛濤詩が多くの人々に知られるようになったのは、江戸時代中期以降と判断される。

表Ⅰ　薛濤詩を収録する総集の日本への伝来年と和刻本刊行状況

	書　名	編　者	成立年	薛濤詩	日本への伝来年	和刻本刊行
1	又玄集三巻	（唐）韋莊	光化３年（900年）序	２首	※〔注〕（23）参照	享和３年（1803年）
2	才調集十巻	（前蜀）韋縠	910年頃	３首	嘉永２年（1849年）　安政２年（1855年） ※〔注〕（23）参照	文政８年（1825年）
3	文苑英華一千巻	（北宋）李昉等	太平興国７年（982年）	３首	元禄13年（1700年）　寶永７年（1710年） 享保９年（1724年）　享保10年（1725年） 享保11年（1726年）　天明２年（1782年）	
4	吟窗雜録五十巻	（南宋）陳應行	紹興５年（1135年）序	７首	萬治２年（1659年）	文政９年（1826年）
5	分門纂類唐歌詩殘十一巻	（南宋）趙孟奎	咸淳元年（1265年）序	７首		
6	彤管新編八巻	（明）張之象	嘉靖33年（1554年）序	12首	享保11年（1726年）	
7	詩女史十四巻	（明）田藝蘅	嘉靖36年（1557年）序	16首	承應２年（1653年）	
8	彤管遺編二十巻	（明）酈琥	隆慶元年（1567年）序	44首	嘉永２年（1849年）	
9	名媛璣囊二巻	（明）池上客	萬暦23年（1595）序	８首	承應元年（1652年）	
10	萬首唐人絶句四十巻	（明）黄習遠　竄補	萬暦35年（1607年）	73首	寶永７年（1710年）　正徳元年（1711年） 寶暦４年（1754年）	文政６年（1823年）
11	青樓韻語四巻	（明）張夢徵	萬暦44年（1616年）	35首		
12	古今名媛彙詩二十巻	（明）鄭文昂	泰昌元年（1620年）序	84首		
13	名媛詩歸三十六巻	（明）鍾惺		84首	享保８年（1723年）　寶暦４年（1754年） 天明２年（1782年）　寛政11年（1799年）	
14	唐詩豔逸品四巻	（明）楊肇祉	天啓元年（1621年）	３首	元禄12年（1699年）	享保２年（1717年）
15	古今女史詩集八巻	（明）趙世杰	崇禎元年（1628年）序	52首	寶永18年（1641年）　元禄８年（1695年）	
16	唐音統籤一千三十三巻	（明）胡震亨	崇禎８年（1635年）頃	73首		
17	全唐詩録一百巻	（清）徐倬　徐元正	康熙45年（1706年）	28首	享保８年（1723年）　享保９年（1724年） 天保15年（1844年）　弘化２年（1845年） 嘉永３年（1850年）	
18	歴朝閨雅十二巻	（清）揆敘		22首		
19	全唐詩九百巻	（清）彭定求等	康熙46年（1707年）	89首	享保５年（1720年）　享保６年（1721年） 寛保２年（1742年）　寛延４年（1751年） 寶暦４年（1754年）　弘化４年（1847年） 安政２年（1855年）	
20	歴朝名媛詩詞十二巻	（清）陸昶	乾隆38年（1773年）序	29首	嘉永３年（1850年）	
21	薛濤李冶詩集二巻	（清）編者不詳	乾隆46年（1781年）	94首		
22	唐宮閨詩二巻	（清）劉云份		89首		

二　薛濤詩の受容

（一）和刻本による薛濤詩の受容

江戸時代に各種総集によって日本に伝来した薛濤詩には、和刻本に翻刻されて受容されたものもある。第一章「（三）『舶載書目』等から探る薛濤詩の伝来」で、日本への伝来が明らかになった十五種の薛濤詩を収録する総集のうち、次の四種の総集が和刻本に翻刻されて刊行されている。

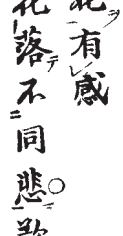
『又玄集三巻』　（唐）　韋莊輯　享和三年（一八〇三年）刊　官版
『才調集十巻』　（前蜀）韋縠輯　文政八年（一八二五年）刊　官版
『吟窗雜録五十巻』（北宋）陳應行輯　文政九年（一八二六年）刊　官版
『萬首唐人絶句四十巻』（南宋）洪邁原本輯　（明）趙宧光校　（明）黄習遠補　文政六年（一八二三年）刊　官版

この他に、『唐詩豔逸品四巻』[24]の一部が、享保二年（一七一七年）に、和刻本『弄石庵唐詩名花集四巻』[25]として翻刻されている。『弄石庵唐詩名花集』の編者については、斎号が弄石庵というだけで詳細は不明である。この『弄石庵唐詩名花集四巻』は、明の天啓元年（一六二一年）刊朱墨套印本『唐詩豔逸品四巻』に収められている、「唐詩名媛集一巻」「唐詩香奩集一巻」「唐詩觀妓集一巻」「唐詩名花集一巻」の四巻のうちの「唐詩名花集一巻」に収録されている詩に、編者弄石庵が独自に選んだ花を詠じた唐詩が加えられて、詩体別に編纂されている。巻頭には引用書目も附されている。[26]序文と跋文では書名が『唐名花詩』となっていたり、作者名や詩題に誤認があったりとかなり杜撰な書物であるが、『唐詩豔逸品四巻』からの引用の詩の本文は底本通りである。

この『弄石庵唐詩名花集四巻』には、『唐詩豔逸品四巻』に収録されている「柳絮」「梅花」「牡丹」の三首と、弄石庵が

独自に選んだ「觀桃李花有感二首」と「竹籬叢」の三首を合わせた六首が、薛濤作として収録されている。しかし、「觀桃李花有感其二」と「梅花」は、薛濤詩であると断定できない。この二首を薛濤作としている文献は、この和刻本『弄石庵唐詩名花集』以外には見当たらない。「觀桃李花有感其二」は作者不明であり、「梅花」は、『全唐詩』では同文の詩を、詩題「春女怨」、蔣維翰作としている。[27] 従って、和刻本『弄石庵唐詩名花集四巻』に収録されている薛濤詩は、正しくは「觀桃李花有感」（薛濤詩原題では「春望詞四首《其一》」）、「竹籬叢」（同じく「竹離亭」）、「柳絮」、及び「牡丹」の四首である。

和刻本『弄石庵唐詩名花集四巻』には訓点が施されている。次に、これに収録されている薛濤詩四首のうちの二首を記す。



觀桃李花有感　　薛濤

花開不同賞花落不同悲欲問相思處花開花落時

桃李花を観て感有り　　薛濤

花開きて同に賞せず。花落ちて同に悲しまず。問はんと欲す相思の處。花開き花落つる時。

柳絮　　薛濤

二月楊花輕復微春風搖蕩惹人衣他家本是無情物一任南飛又北飛

柳絮　　薛濤

二月楊花軽くして復た微。春風揺蕩して人衣を惹く。他家本と是れ無情の物。一任す南に飛び又北に飛ぶこと。

このように、『舶載書目』等に、元祿十二年（一六九九年）に日本への伝来の記録がある『唐詩豔逸品四巻』の一部が、江戸時代中期の享保二年（一七一七年）刊行の和刻本『弄石庵唐詩名花集四巻』に翻刻されている。十九世紀始めに官版として刊行された和刻本『又玄集三巻』『才調集十巻』『吟窗雜録五十巻』、及び『萬首唐人絶句四十巻』より一世紀も早く、十八世紀始めに好事家によって和刻本『弄石庵唐詩名花集四巻』が編まれて、それには薛濤詩が四首収録されていたことが明らかになった。

なお、表Ⅰ「薛濤詩を収録する総集の日本への伝来年と和刻本刊行状況」で、『唐詩豔逸品四巻』の「和刻本刊行」を「享保二年（一七一七年）」としているのは、以上の理由から、『唐詩豔逸品四巻』の一部が、和刻本『弄石庵唐詩名花集四巻』として刊行されているということである。

（二）江戸後期における日本女流詩人の躍進と中国女流詩人の詩の受容の様相

江戸時代中期には、このように薛濤詩を収録する詩集の和刻本の刊行も見られる。そして江戸後期になると、当時流行した漢詩の詩風に新たな変化が起こる。揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』「流行詩風の変遷[28]」には、以下のようにある。

荻生徂徠とその一門は、中国明代の古文辞という文学運動の影響を受けて、盛唐詩を絶対的な規範とし、それを模倣して作詩する擬古の詩を主張した。古文辞格調説と呼ばれたこの詩論・詩風は、十八世紀の前半に大流行した。（中略）そして、十八世紀後半に至ると日本でも、古典を模倣するのではなく、自分の心の動きを源泉とし、使い古された常套的な表現ではなく、清新な表現をめざして詩を詠むべきだとする、清新性霊説の持論が主張されるようになった。（中略）このような清新性霊派の詩風の流行は、江戸時代の漢詩に、二つの大きな現象をもたらすことになった。一つは漢詩の日本化、もう一つは大衆化という現象である。

江戸後期のこのような漢詩の日本化と大衆化という時代の潮流に乗って、頼山陽の門弟であった江馬細香（一七八七～一八六一年）、亀井昭陽の娘である亀井小琴（一七九八～一八五七年）、原古処の娘である原采蘋（一七九八～一八五九年）、梁川星巌の妻である梁川紅蘭（一八〇四～一八七九年）等の女流漢詩人が江戸時代後期の詩壇に登場する。

その江戸時代後期の女流詩人の詩の中に、薛濤詩が収録されている総集の一つである『名媛詩歸三十六巻』を実際に読んだことを示す内容が見られる。それは大垣藩医の江馬蘭斎の長女で、『日本外史』の著者としても知られる頼山陽の女弟子であった江馬細香の詩である。細香詩集『湘夢遺稿』[29]所収「燈下読名媛詩歸（灯下に『名媛詩歸』を読む）」、文化十二年（一八一五年）、江馬細香二十九歳の作である。

燈下読名媛詩歸　　灯下に『名媛詩歸』を読む

静夜沈沈著枕遅　挑燈閑読列媛詞　　静夜沈沈として　枕に著くこと遅し　灯を挑げて閑かに読む　列媛の詞
才人薄命何如此　多半空閨恨外詩　　才人の薄命　何ぞ此の如き　多半は空閨　外を恨むの詩

『湘夢遺稿』には、この詩の他にも、唐詩や宋詩に親しんでいた毎日を詠んだ詩が数多く収録されている。また江馬細香の師であった頼山陽は、細香に中国の閨秀詩人の詩を紹介したり、臨書をすることを勧めたりして、細香の詩を女性らしい清婉優美な詩風となるように導いていた。このような意図は、細香の詩を添削指導した山陽の評語からも窺える。[30]

また、『細香蔵書目録』[31]には「名媛詩歸一帙」とあり、「燈下読名媛詩帰（灯下に『名媛詩歸』を読む）」を詠んでいるその文化十二年に、『名媛詩歸』を購入したことが明記されている。因みに、『細香蔵書目録』には百四十四点の書籍が記載されているが、詩集類とそれに関連する主な書籍を次に挙げる。三桁の数字は『細香蔵書目録』に拠る。

○○三名媛詩歸　○○七詩述　○○八列朝詩集　○一〇女弟子詩選　○一八古詩源　○二五古詩大観　○四二鍾山猷
○四五詩藪　○四七詩轍　○四九唐詩解頤　○五三東坡集選　○五四聯珠詩格　○五六放翁詩鈔　○五七杜律

○五八三体詩　○六〇放翁詩話　○六七浙西詩評　○七一宋三家詩話　○七六詩語解　○七九唐詩集註
○八二忠芬義芳詩巻　○九七浩然斎詩話　一〇二唐詩金粉　一二三詩韻含英　一三九随園詩話　一四一明七才女集

これらの唐詩や宋詩関係の蔵書には、『名媛詩帰』『女弟子詩選』『鍾山献』『明七才女集』といった女流詩人に関するものが見られる。細香の蔵書からも女流詩人への関心の高まりが窺える。

江戸時代後期、清では、嘉慶元年（一七九六年）に、性霊説を主唱した袁枚（一七一六～一七九七年）の二十八人の女弟子の詩を集めた『隨園女弟子詩選六巻』が刊行されている。日本でも、文政十三年（一八三〇年）に、それらの詩を抄録した大窪詩仏（一七六七～一八三七年）の和刻本『隨園女弟子詩選選』が刊行されている。これらの刊行は、女流詩人の詩への関心が更に高まり、漢詩を詠む女性たちが世に知られるようになる世相を反映している。

また、文化、文政期に漢詩の批評家として活躍した菊池五山が、文化四年（一八〇七年）から天保三年（一八三二年）に出版した『五山堂詩話』の全十五巻には、女流詩人十五人の三十七首の詩が載録されている。[32] 更に、少数ながら別集を刊行した女流詩人[33]も存在した。このように江戸時代後期においては、男性のそれに比べれば数は少ないが、女流詩人が男性の漢詩人に伍して活躍した様子が窺えるようになる。こうした江戸後期の女流漢詩人の躍進と、江戸時代中期以降に、中国の女流詩人の詩が日本に多く伝わって読まれた様相が重なる。

（三）明治、大正、昭和期における翻訳詩等による薛濤詩の受容

更に時代が江戸から明治、大正、昭和に移ると、薛濤を紹介する書籍が刊行されたり、それまでとは異なった形での薛濤詩の受容が見られるようになる。明治以降で初めて、薛濤についての記載が見られるのは、明治四十二年（一九〇九年）の山川早水の随筆『巴蜀』[34]である。序文には「是れ余か四川紀遊の書なり」とあり、「薛濤井」「薛濤の宅址」「女校書薛濤

墓」の項目に薛濤に関しての記載がある。この『巴蜀』には、薛濤の詩は引用されていない。

更に、その後の大正、昭和時代には、薛濤詩は、中国文学に造詣の深かった文学者によって、翻訳詩という新しい形で世に出されて愛好されるようになる。佐藤春夫（一八九二～一九六四年）は、まず大正十年（一九二一年）刊行の『殉情詩集』[35]の第一部「同心草」の序詩として、「春望詞四首（其三）」の原詩を引用している。続いて大正十二年（一九二三年）には『我が一九二二年』に、同じ「春望詞四首（其三）」の原詩に、「つみ草」と題した翻訳詩を加えるという形で掲載している。そして昭和四年（一九二九年）には『―支那歴朝名媛詩鈔―車塵集』に、「音に啼く鳥」（春望詞四首《其二》）、「春のをとめ」（春望詞四首《其三》）、及び「秋の瀧」（秋泉）の三首の七五調の韻律美に富んだ和文翻訳詩を収録している。

『車塵集』には、副題に「支那歴朝名媛詩鈔」とあるように、中国の六朝時代から明代の女流詩人三十二名、四十八首の和文翻訳詩が収録されている。明代の楚小志の詩句「美人香骨　化作車塵（美人の香骨　化して車塵と作る）」から題を採り、世に埋もれて散っていった名媛たちの詩が、優婉な大和言葉で詠いあげられている。

次が、その佐藤春夫の『車塵集』に収録されている、「春のをとめ」並びに「秋の瀧」である。

春のをとめ

志づ心なく散る花に　奈げきぞ長きわが袂
情をつくす君をなみ　津むや愁のつくづくし

秋の瀧

差わやかに目路澄むあたり　音に見えしかそけき琴は
かよひ來て夜半のまくらに　寢もさせず人戀ふる子を

春望詞四首（其三）　薛濤

風花日將老　佳期尚渺渺
不結同心人　空結同心草

秋泉　薛濤

冷色初澄一帶煙　幽聲遙瀉十絲弦
長來枕上牽情思　不使愁人半夜眠

日本語のこのような文語の定型詩は、自然のきめ細やかな描写と静かな余情を齎す薛濤の詩風をより際立たせている。佐藤春夫はその後も、「贈遠二首（其一）」並びに「籌邊樓」を『玉關の情』（昭和十八年《一九四三年》）で、「蟬」を『新女苑』（昭和二十五年《一九五〇年》）で、同じく「蟬」を『美の世界』（昭和三十六年《一九六一年》）で、和文翻訳詩として発表している。優婉な大和言葉を駆使して、韻律美に富んだ詩を詠いあげることに巧みであった佐藤春夫は、薛濤詩に多くの関心を寄せたようである。このように度々雑誌等に、その和文翻訳詩を掲載している。

また、『車塵集』が世に出てから三年後の昭和七年（一九三二年）には、角田音吉『支那女流詩講』[36]が刊行されている。薛濤の詩は、春秋時代から清初までの各時代を代表する女流の詩を集めた後編の「歴代女流選　唐時代」に、「贈遠二首（其一）」が、原詩に訓読が施されて収録されている。

続いて昭和十六年（一九四一年）には、小田嶽夫・武田泰淳『揚子江文學風土記』[37]が刊行されている。この第十五章「蜀女二題」では、蜀を代表する二人の才媛として卓文君と薛濤を紹介している。そして、「佐藤春夫氏の技をまねることはむづかしいが、薛濤の詩情をつたへるため、やはり三首を選んで、つたない和文にあらためて見よう」と前文で述べて、薛濤の詩を和文翻訳して掲載している。佐藤春夫の和文翻訳に触発されて詠んだという三首は、「花を見るにつけ」（春望詞四首《其一》）、「日ぐらしの蟬」（蟬）、及び「珠掌（て）をはなる」（珠離掌）である。

更に昭和二十二年（一九四七年）には、那珂秀穂『支那歴朝閨秀詩鈔』[38]が刊行されている。これには、次に挙げる薛濤詩十四首が和文翻訳されて収録されている。『名媛詩歸』を底本としたことも書き添えられている。（　）で、薛濤詩の原題を示す。

春の歌（春望詞四首《其一》）　　春の歌其二（春望詞四首《其二》）　　春の歌其三（春望詞四首《其三》）

春の歌其四（春望詞四首《其四》）　風（風）　蟬（蟬）
水とり（池上雙鳥）　凌雲寺にて（賦凌雲寺二首《其一》）　竹郎廟（題竹郎廟）
姚員外におくる（送姚員外）　鴛鴦草（鴛鴦草）　秋泉（秋泉）
楊蘊中におくる（贈楊蘊中）　僧の蘆笛を吹くをききて（聽僧吹蘆管）

那珂秀穂は、この『支那歴朝閨秀詩鈔』の前書きに以下のように記す。

思へば、佐藤春夫氏の名譯がついゐる薛濤の詩に始めて接したのは中學のなかばであつたらう。爾來幾星霜、かへりみすれば、少年の日の夢ことごとく潰え去つて極目蕭條たる私の脳裡に、いつでも、あのほのかな夢を再び抱かしめてくれるのは、支那女流詩人のここだくの詩篇である。

那珂も、佐藤春夫の名訳に触れて、中国女流詩人の詩の魅力に取り付かれたことを告白している。昭和以降に、日本で薛濤詩が多くの人々に愛好されるようになったのは、佐藤春夫の名訳に負うところが大きいと言えよう。

昭和三十七年（一九六二年）には、土岐善麿『杜甫草堂記』[39]が刊行されている。これは、土岐が成都の杜甫草堂や望江楼公園等の成都の名所を訪れた紀行文である。その中で、薛濤とその詩を紹介している。採録している薛濤詩は、「春望詞」（春望詞四首《其一》）、「贈遠」（贈遠二首《其一》）、「秋泉」、及び「贈楊蘊中」の四首である。原詩と訓読が記されている。

このように明治末期から大正、昭和にかけては、薛濤詩は、四川地方を採り挙げた随筆に引用されたり、女流詩の選集に採録されて受容された。殊に、佐藤春夫の韻律美に富んだ大和言葉による幽婉清麗な和文翻訳詩は、多くの人を魅了し、日本人が薛濤を始めとする中国女流詩人の詩に触れるきっかけとなったと考えられる。

三　薛濤詩が日本で受容された要因

明治になると、「新体詩」という西洋風の詩が詠まれるようになり、漢詩も単に読み下すだけではなく、翻訳詩という形での受容が見られるようになる。薛濤詩は、四川地方の紀行文に引用されたり、女流詩の選集に収録されて受容された。従って、明治期以降については、薛濤詩を引用または収録している紀行文や詩集の編纂のねらいと、薛濤詩の特色から、薛濤詩が日本で受容された要因を探る。

土岐善麿『杜甫草堂記』の紀行文からは、薛濤の詩は蜀の才色兼備の妓女の詩であるということでの興味関心が、執筆の動機となっていることが窺える。一方、薛濤詩を収録している佐藤春夫『車塵集』、並びに角田音吉『支那女流詩講』のような女流詩の選集には、女流詩人の詩の受容についての作者の意図が明確に示されている。

佐藤春夫『車塵集』の序文には、「車塵集収めるところの六朝より明清に至る女流詩人の作品數十篇はまことに庭中第一枝の春を豊かに飾っていつた花ではない。いづれも葉がくれの幽暗を小さな燭の如くひそかに明るくしてそのまゝ地上に散り敷いたつつましい花びらの姿である。」と、それまで脚光を浴びることもなく、消えていった女性たちの詩を集めた詩集であることが強調されている。また、角田音吉『支那女流詩講』には、『唐詩選』や『三體詩』等には女性の詩が掲載されていないことを訝しく思い、女流詩人の詩を集めて世の同好者に紹介したい旨が記されている。これらの女流詩の選集の編纂のねらい等からは、それまで知られていない女流詩人の詩にも次第に目が向けられるようになり、女流詩人の詩集を編纂して、多くの人に伝えたいと考えるようになったことが窺える。

薛濤詩が日本で受容された要因としては、女流詩の選集を望む当時の世相に加えて、薛濤詩の特色も関係していたと考えられる。薛濤詩の約六割は、詩題に「上る」「酬ゆ」「寄す」等と特定の人に宛てた贈答の詩である。これは、薛濤が十一人の剣南西川節度使に仕えた際に、節度使を始め朝廷や地方の役人等に宛てたものである。しかし、日本で編まれた『車塵

集』のような詩集には、特定の人に対して詠んだ贈答の詩ではなく、風景や事物を題材として詠んだ詩が収録されている。引用または収録の最も多い詩は、「春望詞（其一）」「蟬」「秋泉」、及び「贈遠（其一）」の四首である。このうち「贈遠（其一）」は、戦時下という特別の事情[40]での収録であったので、ここでは例外として扱い、「春望詞（其一）」「蟬」「秋泉」の三首から、薛濤詩の特色を探る。

詩の本文は、『全唐詩九百巻』巻八百三「薛濤」を底本として、陳氏靈峯草堂校刊本『洪度集一巻』、並びに翠琅玕館校刊本『薛濤詩一巻』等を参照した。

春望詞四首（其一）

花開不同賞　花落不同悲
欲問相思處　花開花落時

春望詞四首（其の一）

花開くも　同に賞せず　花落つるも　同に悲しまず
問はんと欲す　相思の処　花開き　花落つるの時

底本には、詩題に「春望一作望春」とある。

「花が咲いてもあなたと一緒に賞でることもできず、花が散っても一緒にあわれむことも叶いません。あなたはどうしているのでしょうか、花が咲き花が散るこの時」と詠んでいる。一詩中に同じ文字を繰り返し使うという技法は、近体詩では禁忌としているが、ここではこの技法が、愛しい人を思う清婉な情感の表現に却って効果的に働いている。佐藤春夫『車塵集』の序文にある「つつましい花びらの姿」とは、正しくこのような詩であろう。大正末から昭和にかけて刊行された日本の女流詩選集の編者は、このように可憐で清婉な詩の編纂を望んでいたのである。

蟬

露滌清音遠　風吹故葉齊

蟬

露滌　清音遠ざかり　風吹き　故葉斉し

聲聲似相接　各在一枝棲　　声声　相接するが似(ごと)きも　各々一枝に在りて棲む

底本には、詩題に「蟬一作聞蟬」とある。また底本では、承句を「風吹數葉齊」としているが、『薛濤詩一巻』では「風吹故葉齊」としている。拠って「風吹故葉齊」とした。

「雨が降り木の葉から水滴が滴り落ちると蟬の鳴き声は遠のき、また風が吹くともとの葉から蟬の鳴き声が一斉に聞こえてくる。多くの蟬の鳴き声はひとしきり鳴いては終わり、終わった途端にまた鳴き始めているようだが、同じ蟬が鳴いているのではなく、それぞれ別の枝に止まっている蟬が次々に鳴いているのであった」と詠んでいる。雨上がりの木立で鳴いている蟬の声にじっと耳を澄ませて、鳴き声の変化を追って実に細やかに詠んでいる。詩境が眼前に迫り、蟬の鳴き声が聞こえてくるかのような詠み振りである。

秋泉　　秋泉

冷色初澄一帶煙　幽聲遙瀉十絲弦　　冷色　初めて澄み　一帯の煙　幽声　遙かに瀉ぐ　十糸の弦
長來枕上牽情思　不使愁人半夜眠　　長(つね)に枕上に来って　情思を牽き　愁人をして半夜眠らしめず

底本には、転句「長來枕上牽情思」に「情一作愁」とある。

「冷やかな月の光が冴えわたり始め、山裾の辺りにはうっすら靄がかかる頃、幽かな泉水の音がまるで琴の音のように聞こえてくる。その音が絶えることなく聞こえて、恋しい人を思う心が引き起こされて、愁いに沈んでいる私を一晩中眠らせない」と詠んでいる。冷やかな月の光と靄、幽かに絶え間なく聞こえる泉水の音、と詩境の設定が精彩巧妙で、風景描写と感情表現が自然に溶け合って一体化している。静かな余韻が伝わる。

日本人の手によって引用または採録された薛濤の詩は、このように自然描写がきめ細やかで、余情を齎す詠み振りのものが多い。これは日本の俳諧にも通じるものである。また、女性らしい繊細な詩は、当時刊行され始めた女流詩の総集の編纂

意図とも合致していたために、女流詩の総集にも多く採録されて、日本人に受け入れられたと考える。

おわりに

一幅の「薛濤図」にある添書を出発点にして、日本における薛濤詩の受容とその要因について考察を進めた。薛濤詩は、江戸時代の一六〇〇年代半ばから日本に齎されており、中には、日本人によって再編纂された和刻本『弄石庵唐詩名花集四巻』に収録されて、受容されたものもあったことが明らかになった。

日本において漢詩は、奈良、平安時代から和歌と並行して詠まれ続けてきた。奈良、平安時代の漢詩の作者は、天皇や宮廷貴族、それに一部の知識人層だけであったが、江戸時代の後期になると、作者層は一般大衆にまで広がり、女流詩人も詩壇に登場するようになり、女流詩への関心が高まる。このような女流詩人の躍進と、江戸中期以降に中国の女流詩人の詩が多く齎されて読まれた様相が重なっている。これは、読者の女流詩への関心の高まりに加えて、江戸時代の女流詩人を代表する江馬細香の例のように、日本の女流詩人たちが詩を詠む際には、中国の優れた女流詩を手本にしていたからであろう。日本では、女流詩人の躍進と共に、中国の女流詩人の詩の需要が高まり、多くの人々に読まれて受容されたと考えられる。

明治時代以降は、和文翻訳詩という新しい形での受容が多く見られるようになる。日本で引用または採録された薛濤詩は、自然の姿がきめ細やかに詠まれているものが多い。女性らしく繊細で清婉な詩は、当時刊行され始めた女流詩の総集の編纂意図とも合致していたことが、日本で受容されて、和文翻訳詩として愛誦された要因と考えられる。

また、本稿では、日本における薛濤詩の受容についてのみ考察したが、薛濤は、薛濤箋という小詩箋を考案していることから、その名が知られているという側面もある。従って、これに関連した類書等からも、薛濤の名を知り得ることは可能であったと考えられる。これについての考察は、今後の課題としたい。

注

（１）小田海僊は、九州に遊学して中国元明時代の古書画を模写するなどして研究を重ねて独自の画風を確立した。清楚な画風に特徴があり、山水画・花鳥画・人物画を得意とした。高野山や京都御所の障壁画（一八五五年）等の大事業を手掛けている。

（２）『雲溪友議一巻』『唐摭言十五巻』『鑑誡録十巻』『稿簡贅筆五巻』『蜀牋譜一巻』『唐詩紀事八十一巻』『唐才子傳十巻』『蜀故二十七巻』等の筆記類や詩話類、それに『薛濤詩一巻』『名媛詩歸三十六巻』『洪度集一巻』及び『全唐詩九百巻』「薛濤」の各小伝等多数ある。また〔唐〕李璵撰『薛濤傳』と称するものがあり、〔明〕秦淮寓客編『綠牕女史十四巻』巻十二「青樓部上」に採録されているが、これについては、小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』（大修館書店　一九七五年）「薛濤傳」には、「著者、年代とも疑問である」とある。

（３）『説郛』（〔明〕陶宗儀等撰『説郛三種』（上海古籍出版社　一九八八年）所収）巻四十四　〔南宋〕章淵撰『稿簡贅筆五巻』

（４）『重較説郛』（〔明〕陶宗儀等撰『説郛三種』（上海古籍出版社　一九八八年）所収）巻九十八　〔元〕費著撰『蜀牋譜一巻』

（５）現存している薛濤詩別集での所収詩数は、次の通りである。

〔唐〕薛濤撰『薛濤詩一巻』（翠琅玕叢書第四集所収　光緒十年翠琅玕館校刊）では八十五首

〔唐〕薛濤撰『洪度集一巻』（光緒三十二年　貴陽陳氏靈峯草堂校刊本）では八十九首

また、薛濤詩校注本での所収詩数は、次の通りである。

「漢詩大系」第十五巻　辛島驍著『魚玄機　薛濤』「薛濤」（集英社　一九六四年）では八十九首（他に補遺三首）

張篷舟箋『薛濤詩箋』（北京：人民文学出版社　一九八三年）では九十一首

陳文華校注『唐女詩人集三種』「薛濤詩」（上海古籍出版社　一九九四年）では八十九首

以上のように、所収詩数は八十五、八十九、九十一首と諸説あるので、ここでは約九十首とした。

（６）注（５）所引「漢詩大系」第十五巻　辛島驍著『魚玄機　薛濤』。以下「漢詩大系」『薛濤』と表記する。

（７）薛濤に関する先行研究としては、西村富美子「薛濤詩序説」（『四天王寺女子大学紀要』13　一九八〇年）がある。これには、「薛濤の詩集及びその内容の一部を紹介するとともに、問題点の幾つかを指摘することを、この稿の主目的とした」とあり、薛濤の詩集についてと詩の作者の異説についてを中心に論じている。また、関連書籍としては、中尾青宵『薛濤詩和律翻訳ノート』（船橋印刷　一九九八年）がある。

（８）中国では、宋江訳『漢詩大系　薛濤詩』が出版されており、劉天文『薛濤詩四家注評説』（成都：巴蜀書社　二〇〇四年）の「評説」には、これに基づく論述が多く見られる。従って、日本の「漢詩大系」『薛濤』が与えた影響は大きいと考える。

（９）注（５）所引『薛濤詩箋』。張篷舟『薛濤詩箋』では、〔南宋〕趙孟奎輯『分門纂類唐歌詩殘十一巻』から、薛濤詩を新たに二首発掘して総数九十一首として、その全詩に箋注を加えている。その後の薛濤詩研究では、本箋注に拠るものが多い。

（10）中国における薛濤研究に関しては、『薛濤詩四家注評説』の一六九～一八一頁に「近百年薛濤研究評述」と題して、その詳細が記されている。

(11) 劉天文『薛濤詩四家注評説』(成都：巴蜀書社　二〇〇四年)　四家注とは、次の四氏の薛濤詩箋注本を基にしている。
辛島驍「漢詩大系」『薛濤』(集英社　一九六四年)　張篷舟箋『薛濤詩箋』(北京：人民文学出版社　一九八三年)
陳文華校注『唐女詩人集三種』「薛濤詩」(上海古籍出版社　一九九四年)　彭雲生校注『薛濤詩校正』(成都薛濤研究会が保管の手書き原稿の複写　執筆年未詳)

(12) 「薛濤図」は、京都にある洛東遺芳館の所蔵品である。一九九八年に東京国立近代美術館において開催された展覧会「文人画の近代　鉄斎とその師友たち」に出品された。掲載している「薛濤図」は、その際に刊行された図録の複写である。

(13) 「留京於蜀」の「京」は衍字と思われる。

(14) ここで「薛濤図」添書と照合した書籍は、次の通りである。
〔唐〕薛濤撰『薛濤詩一巻』(翠琅玕叢書第四集所収　光緒十年翠琅玕館校刊)小伝
〔唐〕薛濤撰『洪度集一巻』(光緒三十二年　貴陽陳氏靈峯草堂校刊本)小伝
〔明〕鍾惺點次『名媛詩歸三十六巻』(明刊本　勉善堂藏板)小伝
〔南宋〕章淵撰『稿簡贅筆五巻』　注(3)を参照。
〔元〕費著撰『蜀牋譜一巻』　注(4)を参照。

(15) 亡佚している四種の別集に関しては、各文献に次のように記されている。
〔南宋〕晁公武等撰『昭德先生郡齋讀書志四巻後志二巻』(四部叢刊三編史部景故宮博物院圖書館藏宋淳祐袁州刊本)前志巻四中には、「薛濤錦江集五巻」とある。
〔南宋〕晁公武撰〔清〕王先謙校『昭德先生郡齋讀書志二十巻』(臺北廣文書局用光緒十年刊本景印　書目續編所収)巻十八には、「薛洪度詩一巻」、王先謙注「袁本作薛濤錦江集五巻」とある。
〔南宋〕陳振孫撰『直齋書録解題二十二巻』(覆叢書集成初編聚珍版叢書本)巻十九には、「薛濤集一巻」とある。
〔元〕辛文房撰『唐才子傳十巻』(叢書集成初編指海所収本排印)巻六には、「錦江集五巻」とある。
即ち、『昭德先生郡齋讀書志』には蜀刻四巻本を重刊した袁本と蜀刻二十巻本を重刻した衢本があり、袁本では「薛濤錦江集五巻」、衢本では「薛洪度詩一巻」としている。また、『唐才子傳十巻』には「錦江集五巻」とあることについて、傅璇琮主編『唐才子傳校箋』(中華書局出版　一九八七年)では、「《才子傳》稱元代《錦江集》尚傳，不確」としている。しかし、文献に存在の記録があるものは、疑わしくとも、存在していた可能性はあるということなので、『薛濤錦江集五巻』『薛洪度詩一巻』『薛濤集一巻』『錦江集五巻』のすべてを挙げている。

(16) 現存している別集二種については、注(14)所引『薛濤詩一巻』並びに『洪度集一巻』を参照。

(17) 平岡武夫編「唐代のしおり」第四『唐代の詩人』(京都大学人文科学研究所　一九七七年)、同じく第十一『唐代の詩篇』(京都大学人文科学研究所　一九六四年)

(18) 注（5）所引『薛濤詩箋』の「版本源流」（四十～四十三頁）に添付されている資料である。

(19) ここに挙げた文献は、以下のテキストに拠る。

〔唐〕韋莊輯『又玄集三巻』（一九五八年用享和三年江戸昌平坂學問所刊官板本景印）
〔前蜀〕韋縠輯『才調集十巻』（四部叢刊集部景德化李氏藏述古堂景宋寫本）
〔北宋〕李昉等奉敕輯『文苑英華一千巻』（民國五十六年用明刊本景印）
〔南宋〕陳應行輯『吟窗雜録五十巻』（一九九七年用明抄本縮微謬片景印）
〔南宋〕趙孟奎輯『分門纂類唐歌詩殘十一巻』（景錄絳雲樓藏本　選印苑委別藏）
〔明〕張之象輯『彤管新編八巻』（四庫全書存目叢書補編所収　景北京圖書館藏明嘉靖三十三年刻本）
〔明〕田藝蘅編『詩女史十四巻』（四庫全書存目叢書集部所収　景上海圖書館藏明嘉靖三十六年刻本）
〔明〕酈琥輯『彤管遺編二十巻』（『姑蘇新刻彤管遺編二十巻』四庫未収書輯刊集部所収　景明隆慶元年刻補修本）
〔明〕池上客編『名媛璣囊二巻』（明萬曆二十三年鄭雲竹刊本）
〔南宋〕洪邁原本輯（明）趙宧光校（明）黄習遠竄補『萬首唐人絶句四十巻』（北京圖書館藏明刊嘉靖本影印）
〔明〕張夢徵彙選　朱元亮輯注『青樓韻語四巻』（中國古代版畫叢刊二編第四輯　一九九四年　景萬曆四十四年刊本）
〔明〕鄭文昂編『古今名媛彙詩二十巻』（四庫全書存目叢書集部所収　景北京大學圖書館藏明泰昌元年張正岳刻本）
〔明〕鍾惺點次『名媛詩歸三十六巻』（『古今名媛詩歸』）（明刊本　勉善堂藏板）
〔明〕楊肇祉編『唐詩豔逸品　唐詩名媛集一巻　唐詩香奩集一巻　唐詩觀妓集一巻　唐詩名花集一巻』（明天啓元年刊本）
〔明〕趙世杰輯（明）江之進等校『古今女史　前集十二巻　詩集八巻　附録一巻』（明崇禎元年序刊本）
〔明〕胡震亨編『唐音統籤一千三十三巻』（北京故宮博物院藏清康熙刻本）
〔清〕徐倬　徐元正同輯『御定全唐詩録一百巻』（清康熙四十五年刊本）
〔清〕揆敘輯『歴朝閨雅十二巻』（四庫未収書輯刊集部所収　景清康熙刻本）
〔清〕彭定求等奉敕輯『全唐詩九百巻』（清康熙四十六年御定　一九六〇年北京中華書局　據揚州詩局本排印）
〔清〕陸昶輯評『歴朝名媛詩詞十二巻』（清乾隆三十八年紅樹樓刊本）
〔清〕編者不詳『薛濤李冶集二巻』（欽定四庫全書「集部八　總集類」所収　編修汪如藻家藏本）
〔清〕劉云份輯『唐宮閨詩二巻』（四庫全書存目叢書補編所収　景湖北省圖書館藏民國交通圖書館影印康熙夢香閣刻本）

(20) 『萬首唐人絶句四十巻』は、その原本は、紹熙三年（一一九二年）成立の洪邁編の百一巻であったが、編録の問題があり、明の萬曆三十五年（一六〇七年）に、趙宧光校、黄習遠竄補によって改編された四十巻本が流伝していることから、日本へ伝わったものも、この四十巻本であると考えられる。内閣文庫藏の資料「寶曆四年舶來書籍大意書戌番外船」（『江戸における唐船持渡書の研究』の三二六頁）の「萬首唐人絶句」欄にも、「……萬曆三十五年ノ刊ニテ御座候」とある。なお、ここでは、文献を成立順に列挙しているが、この『萬首唐

人絶句四十巻』は、改編した四十巻本の成立年である。

(21) 『名媛詩歸三十六巻』の叙に「古今名媛詩歸叙」とあることから、『古今名媛詩歸』と題している文献もある。従ってここでは、同一のものと看做している。

(22) 大庭脩『江戸における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所　一九六七年)
大庭脩『宮内庁書陵部蔵舶載書目　附解題』(関西大学東西学術研究所　一九七二年)
大庭氏は、『江戸時代における中国文化受容の研究』(同朋舎出版　一九八四年)の「書後私語」で、「前著(『江戸における唐船渡書の研究』)はしかしながら、紙幅に限度があり、容れるべくして容れ得なかった資料をその後機会あるごとに活字にした。いま念のためそれらを記して、もしや利用される向があれば御参考に願いたい。」として、該当する資料を次のように記している。『舶載書目』の「緒言」でも、同様の旨を記している。
「元禄元年の唐本目録」(『史泉』第三十五・三十六号　関西大学史学会　一九六七年)
「内閣文庫の購来書籍目録」(『関西大学東西学術研究紀要』一　関西大学東西学術研究所　一九六八年)
「東北大学狩野文庫架蔵の御文庫目録」(『関西大学東西学術研究紀要』三　関西大学東西学術研究所　一九七〇年)
また更に、その後の研究で明らかになった資料も刊行している。そのうち、直接関連のあるものは次の資料である。
「寅十番船齎来書目」「寅十番船大意書」(『関西大学東西学術研究所資料集刊十三―五　安永九年安房千倉漂着南京船元順号資料―江戸時代漂着唐船資料集五―』　関西大学東西学術研究所　一九九二年)
従って、ここでは、『江戸における唐船持渡書の研究』並びに『舶載書目』に加えて、これらの資料からも考察している。

(23) 『又玄集三巻』並びに『才調集十巻』は、単行本の他に、『十種唐詩選』と『唐人選唐詩(八種)』にも所収されている。
〔清〕王士禎輯『十種唐詩選』所収の『又玄集三巻』には二首と、『才調集十巻』には三首が採録されている。この『十種唐詩選』は、享保八年(一七二三年)、享保十六年(一七三一年)、享保二十年(一七三五年)、寶暦九年(一七五九年)、弘化四年(一八四七年)に伝来の記録がある。また〔明〕毛晉輯『唐人選唐詩(八種)』所収の『才調集十巻』には、三首が採録されている。この『唐人選唐詩(八種)』は、寛文元年(一六六一年)、寶永七年(一七一〇年)、天明二年(一七八二年)に伝来の記録がある。

(24) 注(19)所引『唐詩豔逸品』を参照。

(25) 「和刻本漢詩集成」(總集篇　第三輯)所収『弄石庵唐詩名花集四巻』享保二年(一七一七年)正月京都富倉氏覆明刊後印本

(26) 引用書目として『薛濤詩』とあるが、『薛濤詩一巻』ということではなく、薛濤の詩集という意味合いであったと考える。なぜなら、作者弄石庵が独自に選んだ三首(「觀桃李花有感二首」と「竹籬叢」)は、『薛濤詩一巻』とは文字の異同が多く、『薛濤詩一巻』を引用したとするには疑問あるからである。

(27) 『唐詩豔逸品』で詩題を「梅花」としている同文の詩は、『全唐詩』巻百四十五では、詩題を「春女怨」、作者を蔣維翰としている。

(28) 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム「五山堂詩話」の世界』(角川書店　二〇〇一年)の「流行詩風の変遷」(十一～十二頁)

(29) 門玲子『江馬細香詩集「湘夢遺稿」』上（汲古書院　一九九二年）

(30) 江馬細香は、自作の詩を京都にいる師の頼山陽に送ると、山陽が朱筆で添削を施し評語を書き加えて送り返す、という詩の指導を長年受けていた。それが注（29）所引『江馬細香詩集「湘夢遺稿」』に「山陽評」として記されている。その山陽の評語には、「眞閨秀之詩也」「眞女郎詩絶佳」等という賛辞がしばしば見られる。

(31) 『細香蔵書目録』（江馬細香著　頼山陽批点『湘夢詩草』影印　小林徹行解題著『山陽先生批点湘夢詩草』（汲古書院　一九九八年）所収）

(32) 揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院　一九九八年）の「第一章　漢詩の隆盛―江戸漢詩史概説―」「五　女流詩人誕生」を参考にした。

(33) 横山蘭蝶『海棠園合集』文化十二年（一八一五年）刊、同『断香集』文政九年（一八二六年）刊、横山蘭畹『続香集』天保五年（一八三四年）刊、梁川紅蘭『紅蘭小集』天保十二年（一八四一年）刊、高橋玉蕉『玉蕉百絶』嘉永三年（一八五〇年）刊等の女流詩人の別集が刊行されている。

(34) 山川早水『巴蜀』（成分館　一九一〇年）

(35) 佐藤春夫『殉情詩集』（新潮社　一九二一年）
次が、以下に挙げている、佐藤春夫が薛濤詩を和文翻訳した詩が収録されている詩集等である。
『我が一九二二年』（新潮社　一九二三年）
『―支那歴朝名媛詩鈔―　車塵集』（武蔵野書院　一九二九年）
『玉闕の情』（浄善山房　一九四三年）
『新女苑』（実業之日本社　一九五〇年）
『美の世界』（朝日新聞社　一九六一年）

(36) 角田音吉『支那女流詩講』（立命館出版部　一九三二年）

(37) 小田嶽夫・武田泰淳『揚子江文學風土記』（龍吟社　一九四一年）

(38) 那珂秀穂『支那歴朝名媛詩鈔』（地平社　一九四七年）

(39) 土岐善麿『杜甫草堂記』（春秋社　一九六二年）

(40) 注（35）所引『玉闕の情』の「はしがき」には、「漢詩のなかから夫婦の情愛を歌ったもの、わけてもその戦争に関聯したものを初学のために訳出して見せよといふ申しつけである」と、戦時下での特別の事情があったことを断わった上で掲載している。

【キーワード】
・薛濤　・小田海僊　・江馬細香　・佐藤春夫　・舶載書目

The Reception of Xue Tao's Poems in Japan

Yokota Mutsumi

The Tang period was a time when classical poetry experienced unprecedented growth in China. Xue Tao 薛濤 was a female poet who flourished in the mid-Tang (second half of 8th cent. to early 9th cent.) and is known, together with Yu Xuanji 魚玄機, as one of the two greatest female poets of the Tang. Recognized for her poetic talent, she was summoned by the military governor of Jiannan-Xichuan 劍南西川 circuit in Shu 蜀, where she recited poems while serving as a hostess at banquets. During this time she exchanged poems with many well-known poets such as Yuan Zhen 元稹, Bo Juyi 白居易, and Liu Yuxi 劉禹錫.

There is a Japanese *Painting of Xue Tao* which is accompanied by an 80-character inscription. It was produced by Oda Kaisen 小田海僊, a painter of the so-called Southern school of literati painting (*nanga* 南画) who flourished in the second half of the Edo period. On which books did he base himself when composing this inscription? And how did knowledge of Xue Tao's life and poems spread to Japan? The aim of this article is to provide answers to these questions.

Towards this end, I first clarify what sorts of collections of Xue Tao's poems and general anthologies including some of her poems have been compiled until now. On the basis of catalogues such as the *Hakusai shomoku* 舶載書目, I then explore the question of when these anthologies were brought to Japan. As a result, it was ascertained that Xue Tao's poems were introduced to Japan during the mid to late Edo period, not in collections of her poems but in various general anthologies. It is to be surmised that the inscription on *Painting of Xue Tao* was written on the basis of one of these general anthologies.

It is evident that in the second half of the Edo period female poets of Japan, who had begun to make rapid advances at the time, were consulting the poems of Xue Tao and other Chinese female poets when composing their own poems. This can also be inferred from the poems and book collection of the female poet Ema Saikō 江馬細香. There is, moreover, evidence that Xue Tao's poems were printed in Japan.

From the Meiji era onwards, Xue Tao's poems were not simply read in the pseudo-classical *yomikudashi* 読み下し style, but also began to be translated into Japanese. A pioneer in this was Satō Haruo 佐藤春夫, who produced translated poems of rhythmic beauty in traditional seven-and-five-syllable metre using an elegant, purely Japanese vocabulary.

I suggest that factors in this reception of Xue Tao's poetry from the middle of the Edo period onwards were a rising demand for poems by Chinese female poets as a result of advances being made by Japanese female poets and a contemporary penchant for her poetic style, which was feminine, delicate, and enchanting.

Keywords: Xue Tao, Oda Kaisen, Ema Saikō, Satō Haruo, *Hakusai shomoku*